

## 刺激の有無が選好判断におけるカスケード現象に与える影響

明治学院大学 心理学部心理学科 金城ゼミ

天野楓 岩倉萌乃香 上野あさひ 大北悟司 大島奏波 大谷昌也 織田遥子  
斎藤俊樹 櫻田みのり 佐藤瞳 寺田知史 田路純菜 平野正和 村田奈津子  
山中健介 吉田幸代 若月魁

### 目的

二者択一の強制選好判断を行う際に、最終決定の直前に視線がより好ましいと思う方に偏るという現象「視線のカスケード現象」が報告されている(Shimojo et al., 2003)。本研究は、カスケード現象が二者択一の強制選好判断においてみられるのかを追試するとともに、片方の刺激が呈示されていない場合でもカスケード現象が起こるのか、そしてその割合を調べることを目的とした。

### 方法

大学生 25 名のうち、教示に従わなかったなどの理由から除外した 6 名を除く、19 名のデータを分析に使用した。実験の教示を行い練習 5 試行の後、顔刺激を用いた実験を 56 試行、ロゴ刺激の実験を 20 試行、計 76 試行を実施した。1 試行は、知覚条件課題と記憶条件課題からなっており、実験は参加者がボタンを押すことにより開始され、まず画面上に注視点が呈示された(1500ms)。その後、二枚の刺激が呈示され、より好きだと思うもの刺激に対応するボタンを押すことで回答してもらった(知覚条件課題)。二つの刺激が消えた後、注視点のみの画面が呈示され(500ms)、知覚条件課題において提示された刺激とは異なる新たな刺激が第 3 の場所に提示され、前に選択し記憶した刺激と、新たに提示された刺激の二択で選好判断をさせ、対応するボタンで回答してもらった(記憶条件課題)。

### 結果と考察

Shimojo et al.,(2003, 2007)を参考に、1600ms 前までの視線量の平均を 4 変数のシグモイド曲線にあてはめ各条件ごとに比較した。さらに判断決定時の視線の偏りの条件ごとの差を検討するため、2(呈示条件:知覚, 記憶)×2(刺激の種類:顔, ロゴ)参加者内分散分析を行った。結果、刺激の種類の違いによる選択時の視線の偏りの主効果、および、交互作用は見られなかったが( $F(1,18)=0.65, 0.43, n.s.$ )、呈示条件の主効果が見られた( $F(1,18)=13.33, p<.01$ )。知覚条件課題においては Shimojo et al.,(2003, 2007)で報告された典型的なカスケード現象が確認された。一方、記憶条件課題では選好判断の決定時の 500ms 前から視線が偏り始め、約 40%から 70%に上昇するという典型的なカスケード現象とは異なる結果が得られた。これにより、知覚条件と記憶条件では視線の動きが違うことが示唆された。記憶条件課題において、前課題で選んだ記憶した刺激と呈示され知覚している刺激の選択率は 66%と 34%であり、選ぶ確率が 2:1 であるため、知覚している刺激がより好まれるわけではないことが分かった。これらの刺激ごとに視線を分析した所、3 枚目の新しく呈示された刺激を選好した場合には視線の動きはほとんど見られず(その刺激上に視線が固定)、前課題で選んだ記憶上の刺激を選好した場合には、その刺激が前課題下で呈示させた場所への視線の偏りが認められた。この結果から、選好判断において刺激が記憶上にしかない場合においても、意思決定に視線が関与する傾向がある可能性が示唆された。